水曜通信17

東北学院宗教センター編

2022年
5月

LIFE　LIGHT　LOVE

「昇天」
（使徒言行録１：９）
田中 忠雄作　1987年

「イエス･キリストの昇天」の場面。
イエスは40日にわたって使徒たちの前に現れ､神の国について話された（１：３）。そして使徒たちの見ている前で天に上げられた。

第11回
泉キャンパス礼拝堂
ステンドグラス紹介

ペンテコステへの道行き

５月のキリスト教の暦（こよみ）は、イースター（復活日）から、次のキリスト教三大祝祭日の一つであるペンテコステ（聖霊降臨日：2022年は６月５日）へと向かって進んでいきます。

スコットランドの新約聖書学者W・バークレーは使徒言行録２章を講解し、ペンテコステによって誕生した教会を次のように特徴づけました。「教えを学ぶ教会」（42節）、「交わりの教会」（42節）、「祈る教会」（42節）、「敬虔な教会」（43節）、「何かが起こる教会」（43節）、「分かち合う教会」（44－45節）、「礼拝する教会」（46節）、「喜びの教会」（46節）、「賛美する教会」（47節）、「好意をもたれた教会」（47節）。

東北学院は教会の働きをとおして誕生した学校です。バークレーが示した「教会」の部分を「学校」に置き換えるとまさに東北学院が目指す学校の姿ではないでしょうか。「教えを学ぶ」だけで終わりません。「礼拝する学校」である東北学院に聖霊なる神のさらなる助けと導きがありますように。

東北学院宗教センター主任（宗教部長）原田 浩司

次回：第52回水曜公開礼拝（公開オンライン礼拝）
5月25日配信予定
学校法人東北学院ホームページをご覧ください。

【第１部　礼拝】
説教：原田 浩司（宗教センター主任）
奏楽：大泉 真理（本学礼拝オルガニスト）

【第２部　音楽による賛美】
演奏：曽根 レイ（リコーダー）
門脇 壮（通奏低音）

第51回 水曜公開礼拝報告（説教：野村 信、奏楽：渡辺 真理）

2022年４月20日（水）　公開オンライン礼拝

讃 美 歌：312番「いつくしみふかき」
聖　　書：マルコによる福音書１章16－20節
讃 美 歌：285番「主よみてもて」
説　　教：「新しい出発」
頌　　栄：542番「よをこぞりて」

【説教要旨】

その日、まだ福音の宣教を開始したばかりの時、主イエスは湖の畔を通って行かれ、二人の漁師を御覧になり、彼らを弟子にされました。この「通っていく」という言葉は現在形で書かれ、さらに「御覧になる」という動詞は未完了という、動作が今も継続しているという意味をもつ用法です。すなわち、主イエスは、今も私たちの傍らを通って行かれ、私たちに目を留めてくださり、「私に従って来なさい」と招いていて下さいます。その招きに素直に応じられる人は、なんと幸いな人でしょうか。ここにはキリストと共に生きる新しい出発があります。

（宗教センターチャプレン　野村 信）

前　奏：J.S.バッハ作曲　キリエ、永遠なる父なる神よ　BWV669
後　奏：J.S.バッハ作曲　我ら皆、唯一なる神を信ず　BWV680

ドイツ・オルガンミサとも呼ばれるJ.S.バッハ《クラヴィーア練習曲集第３巻》は礼拝の様相を呈しています。初版譜には「教理問答歌その他の賛美歌に基づく、オルガンのための種々の前奏曲からなる。（中略）この種の作品に精通する人々の心の慰めとなるように。」と書かれているそうです。（東京書籍『バッハ事典』）

前奏「キリエ、永遠なる神よBWV669」は、礼拝の最初に憐れみのコラールとして歌われるものです。

後奏「我ら皆、唯一なる神を信ず　BWV680」はキリスト教徒には信仰告白にあたる力強いコラールです。

（本学礼拝オルガニスト　渡辺 真理）

礼拝後、音楽による賛美（オルガン独奏・伴奏：渡辺 真理　独唱：我妻 健太）

我妻健太　テノール

玉川学園大学文学部
外国語学科卒業
京都市立芸術大学声楽
学科卒業
放送大学大学院文化科
学研究科修士課程修了

1．カタルーニャ民謡　鳥の歌

カタロニア地方の古い民謡の鳥の歌は、高名なチェリストのカザルスが国連で平和を求めるメッセージとともに「私の生まれ故郷カタルーニャの鳥は peace、peace と鳴くのです」と付言し演奏した事でも知られています。ウクライナのために祈ります。

2．J.S.バッハ作曲　マニフィカトBWV243より 「権力ある者をその座から」

1723年に作曲され、1728年から1731年にかけて改訂されました。マニフィカトのテキストは、『ルカによる福音書』の聖母マリアの祈り（ルカ１：46－55）によります。

3．J.S.バッハ作曲　カンタータ140番より 「シオンは物見らが歌うのを聴く」

三位一体節後第27日曜日用の作品として1731年に作曲されました。このカンタータは「コラール・カンタータ」と呼ばれる形式で作曲されており、フィリップ・ニコライのコラールが用いられています。

4．C.フランク作曲　「天使の糧」

今年生誕200年を迎えるセザール・フランクが1860年の『３声のミサ曲』Op.12の一部として1872年に作曲した、テノール独唱とハープ、チェロ、オルガンのための楽曲で、今回は原曲に近い形での演奏が実現しました。（渡辺 真理）

東北学院の草創期（15）「最初の学生」

― ⑥ 橋 本 宗之進 ―

橋本は、宮城県古川の出身で、神学校の入学以前については不明ですが、1886（明治19）年の入学時の年齢は22歳です。彼もまた早くから神学校を離れて直接伝道に携わり、1889年には古川で伝道を始めます。しかし翌年から東京の組合教会で働くようになり、1894（明治27）年には日本基督教会に復帰して、浪華中会の伊賀上野で伝道します。そして翌年からは当時宮城中会に所属していた北海道の室蘭講義所に転任しました。

その後、橋本は1903（明治36）年北見のクンネップ原野開拓のために設立された宗教共同体「北光社」に迎えられ、翌年北光社講義所を設立し、さらに現在の遠軽町の学田講義所をも兼任します。いずれも神学校の恩師押川が積極的に関わっていた場所で、押川が自ら開拓した伝道拠点に教え子たちを配置したものと思われます。

しかし、早くも1905年には宮城県の白石と大河原に移り、1908年には前回紹介した田村と交代する形でこの地を去り、再び組合教会と関わりを持って石巻の教会（現在の石巻栄光教会）の伝道者となります。その後は日本基督教会に復帰して1913（大正２）年には郷里古川に戻り、自宅を古川教会の新年祈祷会に提供しています。二つの教派を何度も行き来した橋本も、最後は平信徒に戻っていたのかもしれません。

（東北学院史資料センター客員研究員　日野 哲）

― 建築が語る東北学院の歴史（10）―

東北学院の歴史的建築、特に土樋キャンパス草創期に建設された本館・正門・礼拝堂には、ミッション・スクールらしい図象が多数刻まれています。しかも、これらの図象には、近代建築らしい抽象化（幾何学に基づく作図とその変形）の操作が加えられています。本号から数回にわたり、この図象について見てみたいと思います。

典型的な図象を設計図面より抜粋し、fig.1～fig.4に示しました。形の解釈については改めて述べたいと思いますが、これらを見ますと、＋形、これを45°回転した×形（対角線）、正方形・三角形、直線・直角、円・半円といった幾何学の組み合わせを基礎とし、これを各々設ける部位に応じて歪ませる手法が取られていることが分かります。基礎となる図形は必ずしも多くはありませんが、変形操作により、形の多様性が生み出されています。設計者Jay H.モーガンは、しばしば同様の造形手法を用いたようです。例えば本学の本館に用いられた図象が、後に設計した横浜山手聖公会聖堂にも再利用されていることが知られます。

（工学部　崎山 俊雄）

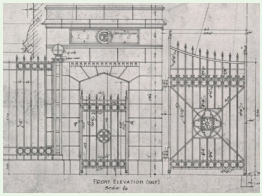

fig.1：正門・門扉正面図
（原図を一部トリミング）

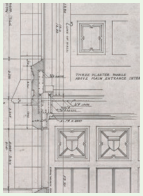

fig.2：本館玄関
内装詳細図（同前）

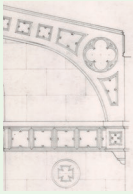

fig.3：礼拝堂内装
詳細図（同前）

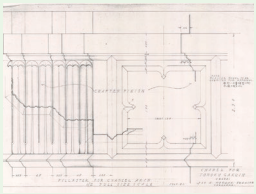

fig.4：礼拝堂ホール付柱
詳細図（同前）

ランカスター神学校との国際セミナー開催のお知らせ
本年５月10日（火）～11日（水）

本学の創設者である宣教師のW.E.ホーイ先生とD.B. シュネーダー先生はアメリカのドイツ改革派教会ランカスター神学校の卒業生ですが、2018年に学長キャロル・リッチ先生が来仙され本学と国際交流協定を結びました。それ以来両校で交流が続いていますが、大きな企画としてランカスター神学校の学生たちと引率の教職員が本学の創立記念の５月に来仙するプログラムを計画中です。昨年の５月も今年も同様に、コロナウイルス感染症で来仙できない状況にあり、そこで、zoomによる遠隔会議でセミナーを開催することになりました。日本側から５回の発表を行い、その都度質疑応答やディスカッションを実施し、学びや交流を深めることにしました。本学から３人（野村信、鐸木道剛、藤野雄大）と他校（栗原健宮城学院女子大学准教授、サム・マーチー尚絅学院大学特任准教授）が担当します。詳細は宗教センターまでお問い合わせください。別刷りのチラシも参考にしてください。

（宗教センターチャプレン　野村 信）

美術による賛美(12)

ゴシックの大聖堂の床には迷路（ラビリンス）があります。ラビリンスとは、ギリシア神話の中でクレタ島のミノス王の依頼で、古代の最高の技術者ダイダロスが、半人半獣のミノタウロスを閉じ込めるために作った迷宮です。しかしなぜそれが大聖堂という中世キリスト教の中心にあるのでしょうか。中世美術研究の権威ハンス・ヤンツェン（Hans Jantzen 1881-1967）は、そこに宗教的意味があるかどうかは確定できないが、それよりおそらくその迷宮を作ったダイダロスの技術を賛える意味があったのだろうと書いています。こういうラビリンスは、ヨーロッパの庭、特にイギリスの庭にはしばしば植栽で作られます。日本でもイギリス流のガーデンニングは盛んですが、日本では人間も自然の一部で、こんな人工的な迷宮はありません。被造物の自然と技術（アート）の賛美としてのラビリンスはキリスト教的世界観を表しています。

（理事長特別補佐〈宗教センター担当〉　鐸木 道剛）

シャルトル大聖堂
Chartres Cathedral

トラクエアハウス Traquair House
スコットランド

マシューズによる古典的
名著の翻訳(2022年刊)

いのち　ひかり　あい

東北学院スクールモットー
LIFE LIGHT LOVE（いのち・ひかり・あい）

東北学院宗教センター編「水曜通信」
第17号
2022年５月９日発行
〒980-8511　仙台市青葉区土樋１-３-１
発行責任者：宗教センター主任　原田 浩司
東北学院宗教センター　TEL：022-264-6558
Email：c.center@mail.tohoku-gakuin.ac.jp